

名古屋 文化情報

2023

Spring

No. 405

NAGOYA
Cultural
Information

Pick Up Gallery / ガルリ ラベ

特集 / 2022 1年をふりかえって

令和4年度 名古屋市芸術賞・名古屋市民芸術祭賞

#zoom up / グラフィックデザイナー 伊藤敦志さん



2023

Spring

Contents

- Pick Up Gallery ガルリ ラペ…………… 2
- 2022 1年をふりかえって…………… 3
- 令和4年度 名古屋市芸術賞…………… 8
- 令和4年度 名古屋市民芸術祭賞…………… 9
- #zoom up グラフィックデザイナー 伊藤敦志さん…10

「なごや文化情報」編集委員

- 上野 茂 (ナゴヤ劇場ジャーナル編集長)
- 杵屋六春 (長唄唄方 名古屋音楽大学講師)
- 黒田杏子 (ON READING)
- 鈴木敏春 (美術批評・NPO法人愛知アートコレクティブ代表理事)
- 瀧津清仁 (指揮者)
- 吉田明子 (人形劇団むすび座 制作部長)

表紙

「田園の宴会」(部分)

(2009年/H145.4cm×W112cm/カンバスに油彩、テンペラ)

宴会が好きな僕は、この数年とても辛かったです。
この絵は、春の陽だまりの中で、家族が田園の中の杜で酒盛りをしていると、
精霊も浮かれ出てくるという、なんてこと無いところが気に入っています。



吉本作次

- 1959年 岐阜県岐阜市に生まれる
- 1984年 名古屋芸術大学美術学部絵画科卒業
- 1997年 名古屋市芸術奨励賞受賞
- 2020年 令和元年度愛知県芸術文化選奨 文化賞(絵画) 受賞
個展、グループ展、多数
- 現在、名古屋芸術大学美術学部 芸術学科 美術領域 洋画コース 教授

Pick Up Gallery



玉井裕子 木版画展「ひととき」(2022年9月)

ガルリ ラペ

— 今日も素敵な出会いがある —

表現する人と見る人がアートを分かち合えるような場所でありたい。アートで心が満たされ…、心弾む…、そんなアートのある暮らしに出会える場所でありたい、という想いから2017年4月にオープンいたしました。La Paixとは、フランス語で「平和・平穏」を意味します。平和な毎日を願い、平穏な生活の中で、ふと幸せを感じられる。そんな場所になれるようにとの想いを込めて名付けました。絵画、版画、陶芸、ガラスなどジャンルにとらわれないことなく、個展や色々なコラボの企画を行っています。また、展示に限らず、貸ギャラリーや教室スペースとしてもご利用いただいています。

設立 2017年 代表 百合草紀江
住所 〒466-0811 名古屋市昭和区高峯町143-15
電話 052-834-5671

取り扱い作家 西村正幸、近藤千鶴、伊藤公子、玉井裕子
可知井英敬、水上卓哉、山本マヤカ、伊藤沙織
chippa ほか
ウェブサイト <https://www.g-lapaix.com/>

2022

1年をふりかえって

洋舞 長谷義隆 (WEB「茶美会」編集長)

コロナ禍は第8波を経て3年。名古屋のダンスシーンはやっと息を吹き返しつつあるようだ。「ウイズコロナ」の時代と向き合い、表現の幅を広げ、異ジャンル協働に挑むアーティストの活躍が目覚ましい。

演出・振付家の浅井信好はその一人。共同主宰する「月灯りの移動劇場」は、ダンスと演劇を融合させた型破りな作品を2016年以来、名古屋から発信。10月20日に初演した新作「Silence」は、日本芸能の古層に流れる伏流水に光をあてた意欲作。全国6都市を公演ツアーをした。

スペイン舞踊を軸に和洋に活動の翼を広げる加藤おりは。神谷俊一郎率いる組太鼓集団が初演した異ジャンル融合の舞台「ジックラト」(5月14~15日、ちくさ座)にヒロインとして出演し、その後全国3都市を巡演した。自身が復興の立役者となった古代舞「五十鈴たたら舞」を磨き上げ、躍動する太鼓と超絶技巧の応酬、古代の息吹を現代に共振させた。加藤はさらに演出・振り付けした「弦・踏・舞」(12月21日、名古屋能楽堂)では、五十鈴たたら舞をソロ、群舞からなる単独の舞台作品として構成し、新境地を拓いた。



組太鼓との「ジックラト」で踊る加藤おりは (写真提供: まといの会)

現代舞踊では、倉知可英がダンスとピアノ(山内敦子)の掛け合いによる「白昼夢への誘い jardin secret 秘密の庭」(9月23日、ちくさ座)に挑んだ。ドビュッシーとサティの音楽に誘われ“秘密の花園”を巡る白昼夢の世界。倉知の演出が冴えた。

現代舞踊協会中部支部の合同公演「ダンスパラダイス2022」(9月19日、名古屋市芸術創造センター)は、中堅・ベテラン9作競演。石川雅実、伊藤麻子の師弟2作は群舞の練度、キレが際立った。黄砂を擬人化した服部由香里の群舞作品は奇想の環境保全ダンス。

バレエでは、岡田純奈バレエ団がコロナ禍にあっても定期公演を貫徹。「シンデレラ」(11月5日、愛知県芸術劇場大ホール)で、ダンサー育成の実りを見せた。塚本洋子率いるテアトル・ド・バレエカンパニーは雌伏3年、40周年記念の深川秀夫版「ドン・キホーテ」全幕(11月25日、愛知県芸術劇場大ホール)に総力を結集した。踊り手個々の才能、個性を

際立たせる“深川節”の滋味、ウイットがあふれた追悼公演で令和4年度名古屋市民芸術祭特別賞を受賞した。越智インターナショナルバレエは、名古屋の師走のバレエ風物詩の孤星を守って、34シーズン。「くるみ割り人形」(12月24日、日本特殊陶業市民会館)を満席にして、2022年の掉尾を飾った。

生涯第一線ダンサーとして活躍した現代舞踊家関山三喜夫が2月2日、91歳で逝去された。ご冥福をお祈り申し上げます。



テアトル・ド・バレエカンパニー深川秀夫版「ドン・キホーテ」
(撮影: 岡村昌夫 (テス大阪))

演劇 小島祐未子 (編集者・ライター)

近年、room16を主宰する八代将弥に注目してきた。八代は俳優として出演する外部公演で多忙な一方、劇作や演出にも秀で、2022年は2作品で成果をあげた。room16とは別に立ち上げた演劇ユニット「16号室」の名義で8月に新作「FICTION」を発表。11月には野田秀樹の「THE BEE」を一人芝居に仕立て上げた。

「FICTION」はチェーホフの名作「かもめ」に取り組む演劇人たちのバックステージもので、八代は演出家役で出演もしている。まさに虚実皮膜の世界に、彼自身の演劇論もうかがえたのは興味深い。生々しい会話劇で鳴らす八代の一つの到達点ともいえる作品だ。圧巻は「かもめ」本番の見せ方。主に稽古場だったアクティヴスペースが上昇し、その下から美しくまばゆいセットが出現。舞台を裏から表へと一気に反転させたのだ。これは久々に味わう劇的高揚感だった。対する「THE BEE」は、人質事件を描くヒリヒリした物語が八代の個性と合っていた。しかも本来4人の俳優で上演される作品を



16号室「FICTION」 8月6日~7日 愛知県芸術劇場小ホール

1人で演じ分けた発想力、演出力、演技力には脱帽するしかない。結果、この作品で令和4年度名古屋市民芸術祭特別賞を受賞した。

愛知人形劇センター製作「人形劇 ^{ほぎうた} 寿歌」は、この戯曲の本質をあらためて示唆。「もの」と「ひと」の間に存在する人形は、作者・北村想の言葉の力と深い思考を真つすぐに伝えてくれた。半面、顔の変わらない人形から観客は自由に表情を読み解くことができるので、作品の多面性は高まる。「寿歌」は1979年初演の際、4組のキャストが競演したことで知られるが、それと同じように1つのイメージに縛られない上演を実現していた。



愛知人形劇センターPresents「人形劇 寿歌」
11月30日～12月4日 損保ジャパン人形劇場ひまわりホール

コロナ禍を乗り越え、公演を再開する劇団も目を引いた。てんぷくプロは1月に「超立体朗読劇 深夜の市長」を、劇団B級遊撃隊は7月に「らんぷ」を発表した。「深夜の市長」は海野十三の同名小説の舞台化。動きあり仕掛けありの演出で、アトリエ昭和薬局前の小さな和室に大都会T市を浮かび上がらせた。一方「らんぷ」は新美南吉の作品群を下敷きにシェイクスピアの「マクベス」と疫病はびこる現代社会を織り交ぜた、佃典彦らしい不条理劇。約30年ぶりに盟友・鬼頭卓見が客演。神谷尚吾の演出も大らかで良かった。

劇団ジャブジャブサーキットと天野天街(少年王者館)は11月、通常と異なる趣向で公演。ジャブジャブサーキットの「シヴァ氏の幕間2022」では、主宰・はせひろいちがチャーホフと岸田國士の短編3作を演出した。天野は「不思議の国のアリス【ALICE Win Underground.】」で後進劇作家たちとコラボレーション。ただ、本編より維新派の名場面の再現が最高潮に映ったのは御愛嬌が過ぎるが。

最後に、1972年創立の七ツ寺共同スタジオが50周年の節目を迎えた。11月にはこけら落としだった「夢の肉弾三勇士」が当地の演劇人によってリメイクされ、世代を越えた交流、時代を越えた熱気をもたらした。秋には元代表の二村利之が長年の功績を認められ、ニッセイ・バックステージ賞を受賞。二村は9月に「往還Ⅲ朗読劇『ガジマル樹の下に』」を篠田竜太とともにプロデュースしており、勇退後も意欲的に舞台芸術を発信し続けている。

洋楽 早川立大 (音楽ジャーナリスト)

コロナ禍が続いているが、コンサートの開催が増え、入場制限もほぼなくなってきた。しかし、客足は回復したとはいえ、音楽家や演奏関係者たちの苦悩は続いている。

〔器楽〕名古屋市内に本拠を置く3つのオーケストラが活発に活動した。名古屋フィルハーモニー交響楽団は第506回定

期演奏会(11月4日～5日、愛知県芸術劇場コンサートホール)を挙げよう。今年度末で音楽監督の座を退く小泉和裕がマーラーの交響曲第2番『復活』に全神経を傾注。オーケストラ、合唱団も鋭く感応して壮大な熱演を現出した。セントラル愛知交響楽団は「ハイドンのロンドン精神 Vol.3」(12月8日、電気文化会館ザ・コンサートホール)が秀逸。常任指揮者角田鋼亮の指揮下、ロンドン・セット全12交響曲中でも地味な第97番と98番に挑み、ハイドンのユーモアを外連味なく描き出した。愛知室内オーケストラでは音楽監督に就任した経験豊かな山下一史が就任披露の第31回定期公演(4月16日、三井住友海上しらかわホール)で早くも好相性を示し、シューマンの交響曲第2番をスケール大きく仕上げた。



名古屋フィルハーモニー交響楽団 第506回定期演奏会
11月4日～5日 愛知県芸術劇場コンサートホール

〔室内楽〕ピアノの桑野郁子、チェロの高木俊彰らの室内楽集団レーベインムジークの旺盛な活躍に指を屈する。全5回のフォーレ室内楽全曲演奏会(2月20日、電気文化会館ザ・コンサートホール)を完結後、シューマン室内楽全曲演奏会(6月12日、同)とプーランク室内楽全曲演奏会(8月14日、同)に着手、いずれも高い演奏水準を維持した。さらに高木は桑野と組んでベートーヴェンのチェロ作品全曲演奏会(11月19日・12月24日、同)で令和4年度名古屋市民芸術祭特別賞に選ばれた。ピアノでは、名古屋市芸術奨励賞を受賞した石川馨栄子がリサイタルデビュー20周年記念のショパン作品演奏に詩情表現の進境を見せた(10月1日、同)。堀夏紀は「AMERICAN PIANO TRANSCRIPTION&SONATA」(11月15日、同)で、バーバーらアメリカ作品に留学経験の成果を披露。セントラル愛知交響楽団の「コンチェルトの夕べ」(8月22日、愛知県芸術劇場コンサートホール)でもガーシュインのピアノ協奏曲をニュアンス豊かに弾き切った。



高木俊彰チェロリサイタル ベートーヴェンチェロ作品全曲演奏会
11月19日 電気文化会館ザ・コンサートホール

〔声楽〕ヘンデルのオラトリオの上演を2つ。東海バロックプロジェクトの10周年記念企画「MESSIAH」（1月23日、三井住友海上しらかわホール）とヘンデル勉強会による『快活の人、沈思の人、中庸の人』（10月10日、東文化小劇場）で、後者は作曲当時の英語の発音を復元して歌うという有意義な試みだった。

名古屋二期会のモーツァルト『歌劇 フィガロの結婚』（10月15日～16日、愛知県芸術劇場大ホール）は支配・被支配の構図を生かした新演出が話題を集めた。愛知祝祭管弦楽団のワーグナー楽劇『トリスタンとイゾルデ』（8月28日、同コンサートホール）、愛知県芸術劇場プロデュースになるモーツァルト少年期の傑作オペラ『バ스티アンとバスティエンヌ』（6月12日、同小ホール）の珍しい再演、バリトンの近野賢一リサイタル、シューベルトの歌曲集『冬の旅』（11月9日、ザ・コンサートホール）が企画、演奏ともに見事な出来栄え。近野は令和4年度名古屋市民芸術祭賞を受賞した。

能楽 ▶ 飯塚恵理人（椋山女学園大学教授）

今年はコロナ禍の影響は残るものの、名古屋能楽堂には催しが戻り始めた。印象に残った舞台を挙げる。

「名古屋能楽堂三月特別公演」（3月6日）は本田布由樹の〈御裳濯〉。本田の御裳濯川の謂れを語る謡は、切れの良いうちに興玉神の化身らしい厳かさとしつこさがあった。後場の神舞もあざやかで良かった。



「名古屋能楽堂三月特別公演」〈御裳濯〉（撮影：工房円）

同じく「名古屋能楽堂十月定例公演」（10月22日）は野口隆行の狂言〈八幡前〉。陽気で人が好い男を無邪気に演じた野口的好演が光った。能は松井彬の〈蝉丸〉、ツレの蝉丸を勤めた長田驍の謡は抑えた調子ながら宮らしい上品さがあった。松井は蝉丸と再会する場面の謡が、特に皇女らしい気品に満ち溢れていた好演であった。

「名古屋金春会」（11月6日）。本田光洋の〈頼政〉は、辞世の句の謡が諦観を込めた文武両道の老将の最期にふさわしく、師の健在ぶりを示した一番であった。〈室君〉はツレ室君の金春飛翔の神楽が、しなやかさの中にしっかりと強さがあり、めでたさにあふれていた。シテ韋提希夫人の金春穂高の中之舞も厳かで美しかった。

尾張国萱津宿が舞台である古能「不逢森」（11月12日）が復曲初演された。シテの娘を演じた加藤眞悟は萱津宿の主（奥津健太郎）とのやり取りに父を思う心情がしっかりと伝わり佳かった。ワキの父親の安田登も娘を失った哀傷の表現が

素晴らしかった。梅若研能会のメンバーが主力の、質の高い復曲であった。

佐藤友彦と久田勘鷗が創作した新作能「裁断橋」も名古屋能楽堂で初演された（12月9日）。これは東海道熱田宿の川にかけられた裁断橋の伝承に基づいており、橋の擬宝珠に刻まれた橋の寄進者・堀尾金助の母の銘文は有名である。前場、金助の母の霊の久田三津子は、戦わずして死んだ金助の無念をしっかりと語った。後場は堀尾金助の霊が妄執で苦しむ様を見せ、母共々にワキ僧（飯富雅介）に回向を頼み、念仏を唱えつつ消えていくという筋であった。金助の霊は橋掛かりで、母の霊は舞台でと場所を隔てて相舞をする演出もなされた。佐藤作の詞章も素晴らしかったが、久田の演出も効果を上げた好演であった。

最後を締めたのは「名古屋宝生会特別公演」（12月25日）。内藤飛能の〈歌占〉は「染色とは」以下の謡に信心の深い神官らしさが殊に表現されており、地獄の曲舞も激しさと美しさの共存する好演であった。衣斐愛の〈松風〉もシテの謡、特に「三瀬河絶えぬ」以下が死後も忘れられない行平への思慕を切なく伝えるものであった。

来年は市内各所の薪能などの復活にも期待している。



新作能「裁断橋」（撮影：工房円）

邦楽・邦舞 ▶ 北島徹也（CBCテレビ 論説委員）

収束に向かうかと思えば再び蔓延したりのコロナ禍、しかし2022年は公演も復興のきざしが見えた。

西川流は『名古屋をどり NEO 傾奇者』（10月15～16日、名古屋市公会堂）で会場ぐるみのイベント化を試み、中でも徳川宗春を題材にした「NEO 舞踊劇 名古屋心中」は、BOYS AND MENが出演したり多様な演出で話題となった。一方、古き時代を偲ぶ『鯉女一門追善舞踊会』（3月27日、日本特殊陶業市民会館 以下「市民会館」ピレッジホール）を弟子たちが催し、えつ、真乃女、珠未に



人間国宝に認定された野村峰山

よる「おもかげ」が舞われた。

艶冶な舞台姿が印象に残る西川流の重鎮、西川菊次郎が12月26日に急逝された。ご冥福をお祈り申し上げる。

『第百七回 工藤会』（8月18日、愛知県芸術劇場大ホール）は三世宗家扇寿の追善、倉鍵・寿々弥・彩夏の家元一家による「戻駕」、扇弥は「年増」を手向けた。

『赤堀会』（6月5日、市民会館ビレッジホール）は先代家元鶴吉五十回忌追善として、加鶴繪の「ひがし山」のほか、歴代が振り付けた舞踊を披露した。

『第26回 五條園美リサイタル』（11月26日、名古屋能楽堂）は荻江節「八島」に想いを込め、創作「いちようの実」は弟子たちが活躍、園千代と美佳園は引き続き、同会場で『2019年名古屋市民芸術祭受賞披露 第7回 桜美の会』を催した。園美が主宰する『芸能集団創の会公演』（7月9日、名古屋能楽堂）で園美は創作「吉野山幻想」、「夢の光芒～平家物語より～」を披露。ジャンル、流派を超えた出演の顔ぶれである。

稲垣流『第七十一回 豊美会』（12月18日、名古屋能楽堂）では舞比が「二人椀久」を、友紀子が「伊勢参宮」を品良く仕上げた。

『瑞鳳澄依リサイタル』（10月29日、名古屋能楽堂）は「茶音頭」をはじめ3曲を舞ったほか、「御座敷尽くし」が楽しく賑やかな趣向だった。宗家藤間流は勸楊主幹『第31回 秋の舞踊会』（10月30日、北文化小劇場）で勸之介が「老松」を、また開演前に日本舞踊の舞台体験を企画、その中から小学生の入門者も出ているようである。『第69回 内田流舞踊会』（11月4日、市民会館ビレッジホール）は寿子の「お吉夢幻」が演劇的な味わいも見せた。

花柳流では、『遊の会』（5月8日、名古屋市芸術創造センター）を衛宗が催し「お吉玉椿」がおきゃんな雰囲気を出した。朱実はとにかく社中の修練の場を、と浴衣会『納涼 朱ざくらの会』（8月20日、名東文化小劇場）を催し、西川真乃女と「三社祭」、また『箏に舞う!』（10月4日、宗次ホール）で箏曲正絃社と共演、気を吐く。寿江育世は新たに『いくよの会』（10月30日、市民会館ビレッジホール）を立ち上げ盛会だった。自身は雪岱写しの「おせん」、一人で舞い切る振付での「紀州道成寺」は華やかさの後、舞台に残る静かな無常感が印象的だった。

さて、長唄では杵屋三太郎『杵三会』（10月23日、名古屋能楽堂）では安田文吉作詞の新曲「恋の熱田めぐり」が披露され、杵屋六秋・六春『第五十八回 秋栄会』『第二十八回 長唄おやこ会』（11月12日、今池ガスホール）は2022年大河ドラマの鎌倉時代をテーマに「賤の芋環」「五郎時致」で、二つの会ともに多く出演した弟子たちに芸どころの底力を感じた。



いくよの会「紀州道成寺」

三曲は、岡崎美奈江が『箏・三絃リサイタル』（10月22日、電気文化会館ザ・コンサートホール）で「八重衣」をはじめ4曲を演奏し、竹本知子は『箏リサイタル2022』（11月3日、電気文化会館ザ・コンサートホール）で令和4年度名古屋市民芸術祭賞を得た。

2022年の快挙は、重要無形文化財保持者（人間国宝）に尺八奏者の野村峰山が認定されたことである。この制度の開始以来、当地方で芸能部門での認定は初めてのことだが、これまでも初代中尾都山からの都山流尺八奏の軌跡を辿った連続演奏会や、縦書きを横書きに、と五線譜化、それらを取めたCDも高く評価されている。その卓越した技量とともに後進への指導、継承に大いに手腕を奮っていただきたい。

美術 田中由紀子（美術批評／ライター）

美術に限らず、あらゆるイベントで新型コロナウイルス感染拡大防止対策が不可欠ではあったものの、様々な規制が緩和されてきた印象がある2022年だった。

2019年に「表現の不自由展」の是非が全国的な話題となった「あいちトリエンナーレ」は、「国際芸術祭あいち」と名称変更された。「表現の不自由展」をめぐる問題から名古屋市は共催とならなかったが、前回は上回る規模での開催となった。今回、会場となった一宮と常滑、有松地区では、地域の歴史や文化、産業から着想された作品が数多く並んだことが特徴的だった。

同時期には、一宮市旧林家住宅等にて「木曾川アートトライアングル 交錯するアート-日々の景色から見えるもの-」、瀬戸市菱野団地にて「瀬戸現代美術展2022」、長久手市各所で「ながくてアートフェスティバル」が行われた。この地域の作家が自ら発表の場を創出しようとするこうした展覧会は、芸術祭と並走しながらここ10年でじわじわと活発化しており、地域全体の文化力の向上につながる取り組みとして評価したい。

美術館では、愛知県美術館が「ミロ展——日本を夢みて」で、日本の書や民芸がミロの創作活動にいかに影響を及ぼしたかというこれまでにない着眼点で、ミロの初期から戦後の大作までを展覧した。この企画により、副田一穂主任学芸員が西洋美術振興財団賞学術賞を受賞した。また、「2022年度第2期コレクション展」では、2021年7月に急逝した画家・設楽知昭の収蔵作品等の特集展示した。壁一面に配された43点から成る〈透明壁画、人工夢〉は圧巻で、絵とは何かを生涯にわたり考え続けた設楽の思索をなぞるような体験ができた。



設楽知昭〈透明壁画、人工夢〉2005年

名古屋市美術館は、「現代美術のポジション2021-2022」と「布の庭にあそぶ 庄司達」で東海エリアを拠点に活動する作家を紹介した。「布の庭にあそぶ 庄司達」では、作家の代表作である〈Navigation〉シリーズの〈Arch〉、〈Level〉、〈Flight〉を初めて一堂に展示し、白い布の緊張と弛緩による心地よい空間を生み出した。

豊田市美術館「ゲルハルト・リヒター展」では、〈フォト・ペインティング〉、〈アブストラクト・ペインティング〉、〈カラーチャート〉等、ガラスや鏡を用いた作品をとおして、60年に及ぶ作家の実践を紹介したが、特筆すべきは作品と展示空間の関係性である。一枚の絵画は、天井高9.6mの大空間、階段を上った上階、上階の小窓と、見る位置や高さが変わることによりイメージを変化させ、新鮮な驚きと共に「見ること」の感動を得た鑑賞者も少なくあるまい。



「ゲルハルト・リヒター展」展示風景（撮影：山本 紘）

ギャラリーでは、4月に小牧市から名古屋市に移転した名古屋造形大学の学内ギャラリーにて「just beyond」が開催。2021年に急逝した画家・登山博文による、あいちトリエンナーレ2010に出品された大作〈反射光〉、〈左と右〉が展示され、話題となった。筆者はこの展示を見逃したが、河合塾美術研究所に併設されるArt Space NAFで「登山博文 Drawing / Tableau 2008-2010」を見たことにより、登山が描きだすイメージがどのように想起されたかを垣間見ることができた。

最後に、2021年12月末に上前津のスペースを閉じたギャラリー フィナルテが、4月に栄で再開したことも付け加えておきたい。30年にわたり同時代の作家を精力的に紹介してきた同ギャラリーが、今後も名古屋の現代美術を支え続けることを期待したい。

文学 清水良典（文芸評論家・愛知淑徳大学教授）

昨年この欄でも紹介した吉川トリコの『余命一年、男をかう』（講談社）が、六月、島清恋愛文学賞を受賞し、また山本周五郎賞の候補にもなった。躍進の目立つ吉川の新刊『流れる星をつかまえに』（ポプラ社）は、卒業の迫る名古屋の高校を舞台に、卒業パーティ「プロム」を企てる物語で、生徒だけでなく、親や教師の人生も巻き込んだ巧妙なオムニバス小説だ。著者の饒舌な語りを存分に活かした痛快な作品である。

もう一人、奥山景布子の新刊『やわ肌くらべ』（中央公論新社）も意欲作だ。ざっくりいえば与謝野晶子の伝記小説であり、与謝野鉄幹と出会ってから名声を得るまでの時代を描いているのだが、本書の特色は、鉄幹の元妻の滝野、鉄幹を慕

った恋と短歌のライバル山川登美子たちが、晶子と対等に視点人物として登場している点だ。賛美に偏りがちな晶子を、本書は人間的な欠点もエゴも遠慮なくむき出しにする。恋の惑乱と短歌の道の険しさが生々しく多角的に浮き彫りになって、読み応えがあった。

6月に中部ペンクラブ総会が2年ぶりに会員を集めてルブラ王山で行われ、大島真寿美を招いて公開鼎談がおこなわれた。名古屋の演劇少女だった大島が作家となり、やがて歌舞伎や浄瑠璃に魅せられて『渦 妹背山婦女庭訓 魂結び』で直木賞を受賞するまでの来歴を、出版社の担当編集者を交えて、三田村博史が聞き出した。名古屋にゆかりの幻の作家、久志芙沙子をモデルに大島が書いた『ツタよ、ツタ』も話題にあがったが、同席した編集者がその芙沙子の孫という機縁もあったので、もっと話を聞きたいところだった。

ところで、その中部ペンクラブの会長を長年務めてきた三田村博史が、中部ペンクラブ文学賞の選考委員も含めて退任することとなった。これまで率先して多くのイベントを企画し、辣腕をふるってきただけに、今後のペンクラブの動向が注目される。

さて、詩人としてはすでに大家の北川朱実の小説（私は詩と同じくらい小説も好きだ）が時おり読めるのが、この地方の雑誌の良いところだ。「クローゼットの中の家族」（『文芸中部』119号）は、女性のもとにストーカーから猫の死体が手紙とともに段ボールで送られてくる怖い話である。しかし手紙の主のことが分かるともっと不気味さが増す。直接的な付き合いを避けがちなコロナ禍の、他者との関係性の不穏さがドロリと覗く。また、身の回りの物全てをバッグに入れてネットカフェで暮らす若い女を描いた弥栄菫の「ショッピングバッグ・レディー」（『峠』78号）は、今日の貧困問題を扱いながら、人間的魅力とたくましい向日性を帯びている力作だった。昨年『名古屋の栄さまと「得月楼」』を上梓して話題となった寺田繁が、『北斗』に「幻の直木賞作家 小説 岡戸武平」の連載を始めたのも楽しみである。岡田武平は第1回直木賞の候補になりながら、今では思い出される機会が乏しい作家だ。



吉川トリコ『流れる星をつかまえに』（ポプラ社）



奥山景布子『やわ肌くらべ』（中央公論新社）

令和4年度 名古屋市芸術賞

令和4年度名古屋市芸術賞は、次の方が受賞されました。「芸術特別栄誉賞」は、長年にわたり優れた芸術創造活動を行い、かつ重要無形文化財の保持者の認定等を受けるなど、本市の芸術文化の振興に顕著な功績があった方に贈ります。

「芸術特賞」は、長年にわたり優れた芸術創造活動を行い、かつ、近年における活動が顕著で、名古屋市の芸術文化の振興に大きな功績のあった方に、「芸術奨励賞」は、継続的に活発な芸術創造活動を行い、かつ、将来の活躍が期待され、今後とも名古屋市の芸術文化の振興に寄与することを期待できる方に贈られるものです。

芸術特別栄誉賞

野村峰山 【伝統芸能(尺八)】



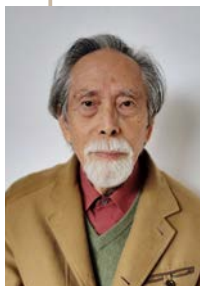
高校在学中の18歳より尺八演奏家の道を目指す。尺八の演奏技法を高度に体現する演奏家として卓越した技量を示し、文化庁芸術祭賞など数々の賞を受賞。

本拠地名古屋では尺八の特性や音楽性、音色を土台にその真髄と可能性を追求しながら、和洋共演のコンサートなどを開催。さらには世界尺八フェスティバルにて招待演奏やワークショップを行うなど尺八の普及と発展に寄与している。

また、都山流尺八楽会の竹琳軒大師範の称号をもち、大学講師として後進の育成にも尽力。2022年には名古屋市初となる重要無形文化財保持者各個人認定(人間国宝)の指定を受けた。こうした長年にわたる芸術創造活動と後進の育成は当地域の文化芸術の振興に顕著な役割を果たしており、その功績は多大である。

芸術特賞

庄司達 【美術(現代美術)】



1968年に布と糸が織りなす空間を作品とした個展でデビューを飾る。以後、「白い布による空間」シリーズを始め、布による空間表現を中心とした創造活動を行い、次々と作品を発表。1979年に名古屋市芸術奨励賞を受賞。

2022年には名古屋市美術館にて個展「布の庭に遊ぶ」を開催するなど、現在も空間表現の追求を続けている。

活動は国内に留まらず、ロサンゼルスやブライテンなど、海外でも作品を出展しており、国際的にも高い評価を得ている。さらに、名古屋市内の工芸高校や大学で数十年にわたり教鞭を執るなど、後進の育成にも尽力してきた。こうした長年にわたる活動は当地域の文化芸術の振興に大きな役割を果たしており、その功績は多大である。

芸術奨励賞

石川馨栄子 【音楽(ピアノ)】



愛知県立芸術大学音楽学部ピアノ専攻を首席で卒業。同大学院修士課程を修了。2002年に初リサイタルを開催して以降、名古屋を拠点に活動を行い、名古屋市民芸術祭賞など数々の賞を受賞。

また、フランスにて第6回ヨーロッパ国際ピアノコンクール第1位及び審査員長賞を受賞し、海外の各種コンクールにおいても優秀な成績を修め、2011年にはパリにてリサイタルを行うなど精力的に活動。

近年は、新型コロナウイルス感染症の影響を受けながらも、ベートーヴェンピアノソナタ連続演奏会(全3回)を開催し、第1回目の公演で第16回名古屋音楽ペンクラブ賞を受賞。2022年にはデビュー20周年を記念したリサイタルを行うなど、積極的に演奏活動を行っており、今後もさらなる活躍が期待される。

石原弘恵 【舞踊(現代舞踊)】



中京女子大学(現・至学館大学)卒業後、至学館大学大学院に入学し、同大学院修士課程を修了。短期留学を重ねながら、独学でモダンダンスとジャズダンスを融合したオリジナルのダンスを探究する。高校非常勤講師をしながら全国のコンクールに挑戦し、「第20回なかの国際ダンスコンペティション」第1位をはじめ多数の賞を受賞。また、海外を含む全国各地の公演にも出演しており、2018年には名古屋市民芸術祭特別賞を受賞。

意欲的な創作活動の一方で、清洲 MDA 講師や大学非常勤講師、至学館高校ダンス部コーチを務め、その指導力は高く評価されている。近年では演劇公演への出演や幼稚園児を対象としたダンス講師を務めるなど、益々その活動の幅を広げており、今後もさらなる活躍が期待される。

加藤洋輝 【伝統芸能(能楽・太鼓方)】



名古屋大学観世会にて謡と舞を前野郁子師、太鼓を助川龍夫師から指導を受ける。1999年より国立能楽堂第6期能楽(三役)研修課程に参加し、16世宗家観世元信師に師事。2001年に舞臺子「善界」能「狸々」での初舞台以降、名古屋を中心に各地で活動。

また、新城能楽社を指導するなど能楽の普及にも取り組む。西尾城址新能には出演及び企画運営に参加し、テーマを設定した選曲等で新しい客層の開拓に努めている。また、観

世流シテ方武田友志氏とともに能楽体験講座を開催するほか、子どもたちが能楽に触れ、親しむ機会の創出にも取り組む。

2022年7月からは(公社)能楽協会名古屋支部副支部長を務めるなど、今後も太鼓方としての活動及び能楽の普及活動の双方において、さらなる活躍が期待される。

名古屋市民芸術祭2022

名古屋市民芸術祭賞

名古屋市民芸術祭は総合的な芸術の祭典として、毎年10月、11月に開催しています。今年度は参加20公演（音楽9、演劇5、舞踊2、伝統芸能4）の中から部門ごとに、特に優秀な公演に「名古屋市民芸術祭賞」を、また、特に表彰に値する公演に「名古屋市民芸術祭特別賞」を授与しました。

名古屋市民芸術祭賞(2公演)

【音楽部門】

近野賢一 バリトンリサイタル ～冬の旅～

●11月9日(水) ●電気文化会館 ザ・コンサートホール

力強さと繊細さを兼ね備えた卓越した表現力で聴衆を魅了した。ドイツ歌曲の長年の研究に裏打ちされた意欲的なプログラムであり、プレトークでの曲目解説や立居振舞からも真摯で誠実な人柄が感じられた。ピアニストとの調和も見事であり、傑出したバリトン歌手としての実力を遺憾なく披露した。



【伝統芸能部門】

竹本知子 箏リサイタル2022

●11月3日(木・祝) ●電気文化会館 ザ・コンサートホール

情熱と技量がのびやかに発揮された芸術性の高いリサイタルだった。照明や舞台転換などの演出も巧みで、最後まで観客を楽しませた。太鼓や尺八とのコラボレーションからは、箏の演奏を引き立たせるだけでなく、一体となって音楽を創り上げる姿勢が感じられ、古典楽器による表現の可能性を期待させる演奏だった。



名古屋市民芸術祭特別賞(3公演)

【音楽部門】(奨励賞)

高木俊彰チェロリサイタル ベートーヴェンチェロ作品全曲演奏会 I

●11月19日(土) ●電気文化会館 ザ・コンサートホール

控えめながらピアノとのバランスがよく、聴衆が最後まで集中できる優れた演奏だった。室内楽メンバーとしての活躍に加え、ソリストとしてベートーヴェンの全曲演奏に取り組む姿勢は、将来への大きな期待を感じさせる。曲目ごとの解説や、知的好奇心を刺激する当日のパンフレットからも、飛躍への意欲が感じられた。



【演劇部門】(チャレンジ賞)

16号室 唯我独尊「THE BEE」

●11月16日(水)、17日(木) ●愛知県芸術劇場 小ホール

野田秀樹のTHE BEEを一人芝居に仕立てるといった挑戦的な舞台を熱演した。舞台美術や音楽などの表現方法が独創的で、緻密な演出へのこだわりが感じられた。今回のチャレンジが若い世代の演劇人に大きな刺激になったことを評価するとともに、今後のさらなる研鑽を期待したい。



【舞踊部門】(メモリアル賞)

40周年記念テアトル・ド・バレエ カンパニー メモリアル公演 深川秀夫版「ドン・キホーテ」全幕

●11月25日(金) ●愛知県芸術劇場 大ホール

2020年に逝去した深川秀夫ならではの振付が随所に見られ、畏敬の念や遺志を継ごうとする思いが伝わる公演だった。コロナ禍にありながら、華やかで大掛かりな舞台で、特に第2幕夢の森の場は、若手ダンサーのアンサンブルがよく整い、幻想的な美しさを見事に生み出しており、次世代の飛躍を期待させるものであった。



#zoom up

ズーム・アップ

グラフィックデザイナー

いとう あつし

伊藤敦志さん

人生を変えたデザイン、 人生を変えた漫画

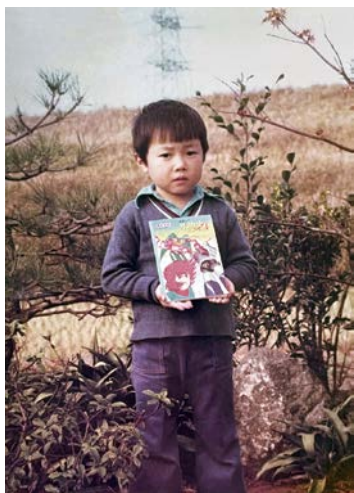
愛知県刈谷市出身の伊藤敦志さんは、東海地方の美術展のチラシやカタログなどを手掛けるグラフィックデザイナー。2019年、仕事の合間に5年をかけて制作した初の漫画作品『大人になれば』が好評を博し、自費出版の作品ながら、第23回文化庁メディア芸術祭マンガ部門新人賞を受賞しました。伊藤さんのこれまでとこれからについてお話を伺いました。（聞き手：黒田杏子）



漫画家になりたい

—どんな子ども時代でしたか？

漫画が大好きでした。幼い頃は『ドラえもん』が好きで藤子不二雄オタクでした。4つ上のいとこの影響もあり、小学生の頃から古本屋で石ノ森章太郎や手塚治虫の古い漫画を探したり、お小遣いはほとんど漫画に使ってましたね。小学3年生からストーリーのある漫画を描き始めました。休み時間に教室で漫画を描いていると、皆が見に来てくれて嬉しかったで



5歳。写真を撮るときはよく本を持っていた。

す。これ（写真）は、小学6年生の時にそれまでに描いた漫画をまとめたものです。



小学6年生で作成した漫画作品集

—タイトルや出版社名、中表紙や著者近影まで描かれていて、「本」として作り込まれていますね。

今こうして見てみると、漫画を描くだけでなく綴じられた「本」を作りたいかったですね。その後もずっと漫画家になりたくて中学、高校と描き続けていましたが、世間はバンドブームでオタクはカッコ悪いという時代でしたので、その頃は漫画を描いていることはあまり言わないようにしていました。高校最後の春休みに15ページのギャグ漫画を描いて、原稿を『週刊少年ジャンプ』の編集部を持って行きました。自分としてはこれを見せたら、すぐにデビューして漫画家になれると思ってたんですよ。でもそうはならなかった。「次回作ができたらまた見せて」と言われて二作目を描いて送って。三作目は少し社会派の作品に挑戦したのですが、人生経験が足りず描けませんでした。そこで一旦漫画をやめました。「あ、このままでは描けないな、なにか違うことをしよう」と。20歳の時、漫画の一コマがそのまま絵画になるんじゃないかという発想で、ペインティング作品を制作して初個展をし、とにかくたくさん作品を描いて、5、6年間は作家活動をしていました。



20歳の時の個展「ONE」
(フェイスポップアートギャラリー／刈谷市／1992年)

デザインの原点はCDジャケット

—2002年にデザインオフィス「AIRS」を立ち上げられますが、伊藤さんはどのような経緯でデザイナーになったのですか？

1992年～93年くらいからのちに渋谷系と言われるような音楽を聴くようになるのですが、その中でもピチカート・ファイヴのCDジャケットは今まで見たことのないようなデザインで衝撃を受けました。それまでのモノの見方や考え方が一変するほど。のちにそのジャケットデザインは、メンバーの小西康陽さんとアートディレクターの信藤三雄さんによるものだと知りました。信藤さんのデザインは、技術的にすごく難しいことをしているというよりは、モチーフの選び方やアイデアのセンスが抜群によかったんです。それまで白黒だったトレイを透明にしたり、歌詞カードが凝っていたり、CDが“新しいメディア”としてデザインされていたんですね。僕もこれをやりたい、と思いました。そこで、ギターを弾ける友達と一緒に音楽活動を始めました。自分でデザインしたブック付のカセットテープをリリースして、レコードショップに置いてもらったり。これが僕がデザイナーになるきっかけになりました。自分でコンテンツからパッケージまで、まるごと作って売る。そのジャケットを見て、他の音楽レーベル

の方からデザインの依頼をいただいたり、当時勤めていた会社でデザインの仕事もやるようになりました。29歳の時に独立し、近年では美術館の展覧会のチラシやカタログなどを手掛けています。デザインは、誰かの「こうしたい」を叶えるお手伝いができる仕事だと思っています。



CD、レコードのジャケットデザイン
(1997年～2005年)

子どもへの贈り物として

—デザイナーとして働きながら描かれた漫画『大人になれば』は、どのようなきっかけで制作されたのでしょうか。

もともとは息子と娘への贈り物として描き始めたんです。子どもたちと家の周りを散歩していると、自分の小さい頃の記憶が呼び起こされ、もう一度人生をなぞっているように感じることもあるんです。この感覚を形にしたいと思うようになりました。息子が小学生になった頃、僕が小学生の時に描いた漫画を見せたら「僕も漫画描く！」と言ったんです。それを見て、じゃあ僕もまた描こうかな、と。昔、描けなかったものが今なら描けるんじゃないかと思いました。

—この作品は、1988年と2020年というふたつの時代を行ったり帰ったりする不思議なお話ですね。このストーリーはどういうきっかけで生まれたのでしょうか。

ロバート・A・ハインラインの『時の門』というSF中編小説から着想を得ています。設定が複雑なので、矛盾のないよう話を考えるのに2、3年かかりました。なぜ1988年と

2020年を舞台にしたかということ、2020年ってキリがいいし、オリンピックが開催予定で年号が街中に溢れているのでわかりやすいと思って。で、長男と僕の年齢差の32年をひいて1988年。さらに1988年は、僕は15、6歳で自分にとってのターニングポイントの年でもあるんです。辛い時期を過ごしていたその頃自分にかけたあげたい言葉があった、というのもこの年を舞台にした理由です。



『大人になれば』伊藤敦志

今の自分だからこそ描ける作品を

—まさに、過去／未来の自分と出会って物語が動いていきますよね。伊藤さんが影響を受けてきたであろう、さまざまな作品へのオマージュも感じられます。

漫画を20年ぶりに描くことになって、今さら昔やっていたことと同じことをしても仕方がないので、以前とは違う視点で描こうと思いました。デザイン的な感覚や、自分が影響を受けたカルチャーを取り入れ、年を取ったからこそ描けるものを追求していきました。セリフがほとんどないのは、映画『2001年宇宙の旅』やジャック・タチなどの影響です。セリフで状況も感情も説明できてしまうからこそ、極力そうしないで、絵で伝えることができないかと試行錯誤しました。帯にコメントを寄せてくださった小西康陽さんとは、15年ほど前に初めてお会いしました。まだ発表前の完成した本をお渡ししたらすぐに読んでくださって「これは人生が変わるよ」と言ってくれたんです。今思うと、本当に変わったのかもかもしれません。

まだ少しかりそうですけど、今は次の作品を描いています。次回作は、少しパーソナルな部分も入れて面白くできれば、と。この年になってまた新しいことがやれるのは幸せなことだなと感じています。



Bunkamura×MAPP_“PLAYTIME”(Bunkamura／東京／2021年)
架空のパリの街をテーマにしたウォールアート(撮影:千代)

なごや文化は寄附でもつ



名古屋市文化基金

支援・育成事業

— 市民やアーティストによる文化芸術活動を支援・育成 —



参加・体験事業

— 市民だれもが参加できるワークショップ・公演等を実施 —



鑑賞事業

— 優れた舞台芸術を鑑賞する機会を提供 —



市民文化の情報発信

— 情報誌の刊行などを通して、様々な文化情報を発信 —



皆さまからいただいた寄附金を活用し、なごや文化創造のための様々な事業を展開しています！

名古屋市文化基金の詳細および
寄附のお申込みはこちら



ご寄附に関する
お問い合わせ

名古屋市観光文化交流局
文化芸術推進課
TEL 052-972-3172

公益財団法人
名古屋市文化振興事業団
TEL 052-249-9390

頼もしい味方をお探しですか？



集客・販促プランナー



アートディレクター



印刷コンサルタント

駒田印刷株式会社 TEL(052)331-8881

〒460-0021 名古屋市中区平和2-9-12 <http://www.kp-c.co.jp>

WE MAKE YOU MOVE
感動をあなたへ

20Hz ← → 20kHz



PRO AUDIO & VISUAL & NETWORK
舞台音響／映像設備
設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売

この領域を超えて最高のパフォーマンスを。

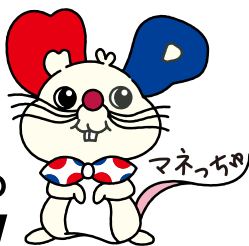
お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する
株式会社 エーアンドブイ
〒464-0846 愛知県名古屋千種区城木町二丁目98
TEL/052-761-5400 FAX/052-761-0909

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命ください。美術展の受付も対応いたします。

業務内容

- ①舞台の企画・制作マネジメント
- ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング
- ④舞台・イベントの運営

MANAGEMENT PRO
株式会社 マネージメント・プロ



〒461-0004 名古屋市中区東区葵2-11-22 アバンテージ葵ビル301
TEL:(052)508-5095 FAX:(052)508-5097 Web:www.mane-pro.com

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

- ◎年間6,600円で毎月お手元にお届けいたします。
- ◎毎月24,000部発行
- ※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、ホール、DM等にて配布

E-mail:mane-pro@mane-pro.com